

5 最近のカキ品種の動向

カキは、この20年間に品種構成が大きく変わったナシやブドウと異なり、長年にわたって「富有」、
「平核無」、「次郎」およびそれらの枝変わり品種が
大半で、その栽培面積はカキ全体の70%以上(2001
年度)を占めている。これに続いて、「西村早生」、
「伊豆」が多いが、近年、減少傾向にある。

本県のカキ品種は「富有」を中心として、早生の
「西村早生」などの数品種を補完的に導入している
場合が多い。「富有」が栽培面積の大部分を占めて
いる産地では、収穫・出荷労力の集中が面積拡大の
制限要因になっている。また、「西村早生」は種子
の有無によって甘渋性が左右される不完全甘ガキで、
品質の安定性に欠け、食感的にも肉質が粗い。同じ
早生の「伊豆」は完全甘ガキであるが、へたすき果
の発生が多いなど欠点がある。

このため、優れた甘ガキ品種育成への要望が強く、
当センターでは農林水産省果樹試験場(現、独立行
政法人農業技術研究機構果樹研究所)が育成した系
統を中心に適応性検定試験を行っている。これらの中
で、品種登録された品種の特性(いずれも完全甘
ガキ)と導入上の留意点について紹介する。

1 「早秋」(表紙写真)

収穫盛期は9月下旬～10月上旬の早生で「西村早
生」とほぼ同時期である。果実は200g前後で、赤
く着色し、糖度は15程度で、肉質はやや軟らかく、
多汁で食味は良好である。へたすき(へたと果実の
接合部にすき間ができる障害)、汚損果(果実表面が
黒変する障害)の発生はきわめて少ない。果形がや
や乱れやすく、果頂部が深くへこんだり、浅い側溝
が生じやすい。同時期に収穫される「西村早生」に
比べて、甘渋性が安定しており、着色、食味ともに
良好で、収量性にも問題ないことから、その代替品
種として期待できる。なお、「早秋」は早期落果が
やや多い傾向があるため、授粉樹の混植等種子形成
を促す管理が必要である。

2 「新秋」

収穫盛期は10月中旬、果実は250g前後で、果皮
色は黄色味が強い。糖度は毎年18前後と高く、肉質
は軟らかく、多汁で食味はきわめて良好である。へ
たすき、果頂裂果は「富有」よりやや多く、汚損果
の発生はきわめて多い。汚損果の発生がこの品種の

最大の欠点で、露地栽培では安定生産が難しいとさ
れている。しかし、直売等販売方法によっては、食
味の良さを生かして有利な販売につなげられる可能
性も残されている。

3 「太秋」

収穫盛期は10月下旬～11月上旬、果実は400g前
後ときわめて大果である。果皮色は黄色味が強く、
糖度は17前後と高い。肉質は非常に軟らかく、多汁
で食味が非常によい。さくさくとした食感は、今ま
でのカキにはない特徴である。果頂部を中心に、条
紋(微少な亀裂)が生じやすく、外観はきれいでは
ないが、条紋発生果は食味がさらによりよいことが知ら
れている。なお、「太秋」は樹勢が低下すると、雌
花が減少して雄花が多く着生し、収量が低下するた
め、樹勢を強く保つ管理が重要である。

4 「夕紅」

収穫盛期は11月中旬で「富有」とほぼ同時期であ
る。果実は250g程度で、糖度は18前後、肉質は軟
らかく、多汁で食味は良好である。へたすき、汚損
果の発生はきわめて少なく、濃赤色に着色し、外観
が非常に優れる。雌花の着生は「富有」より少なく、
安定した収量確保のため、適正な着果量に努め、結
果母枝を多めに残すようにする。「夕紅」は「富有」
と収穫期が重なるが、赤みの強い外観良好な果実と
して補完的に導入できると思われる。

現在、「太秋」を交配親として作られた系統の甘
ガキ、渋ガキを適応性検定試験で検討している。今
後、「太秋」の食味、大果、食感を維持しながら、
外観の優れるカキ品種の登場を期待したい。

福井謙一郎(農業技セ・園芸部)

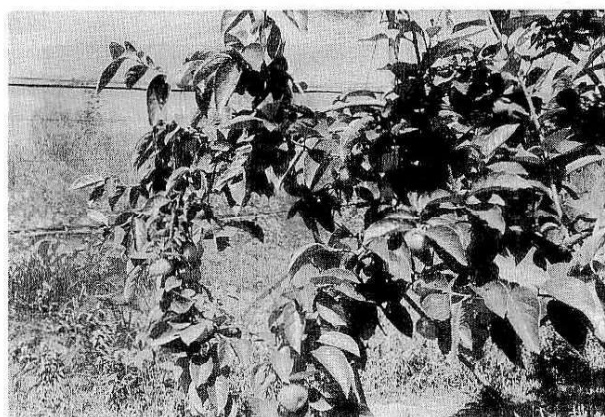


図 「早秋」の着果状況